

山と博物館

第38巻 第8号 1993年8月25日

大町山岳博物館



公開されたカモシカと関係者（左より2人目、小野寺大使、腰原大町市長、一人おいてベヒラーナー園長）
1993.7.4 撮影 川上 剛之助

オーストリアへカモシカを贈る

七月四日朝、ウィーンの空は青く晴れ上がり真夏の太陽が照りつけはじめた。午前十時、シェーンブルン動物園の新たに設けられたニホンカモシカ舎前で「カモシカ贈呈式」が行われた。この贈呈式には大町市より参加した、海外視察研修団の一行のほか、多くの関係者、観覧者が参加した。

式ではオーストリア政府代表、シェーンブルン動物園会長、園長、ウィーン大学教授、駐澳日本大使が歓迎の挨拶を述べた後、カモシカが公開された。

贈呈式で腰原大町市長は「・シェーンブルン動物園で二世が誕生すれば、ヨーロッパで初めてのニホンカモシカの繁殖成功となり、私たちは楽しみにしています」と述べた。今までヨーロッパでの繁殖をした例はなかったのである。

ヨーロッパにニホンカモシカが渡ったのは記録によると、明治十二年に一頭のオスがロンドン動物園へ船便で運ばれて以来、昭和五十九年に山岳博物館からオーストリアへ二頭が贈られるまで百年ものブランクがあった。

今回、二頭のカモシカを贈ったのは、前に贈った二頭が死亡したため、シェーンブルン動物園のベヒラーナー園長の要請に応えたものであり、現在ヨーロッパではベルリン動物園に一頭、それに今回の二頭が飼育されているのみである。

ベヒラーナー園長は、前アルペン動物園長で五十九年にカモシカを贈ったのを契機に大町市とインスブルック市、山岳博物館とアルペン動物園が友好提携をし、アルペン動物園からはシャモア、オオライチヨウなどの動物が山岳博物館に贈られている。

このカモシカの贈呈には、財団法人・日本カモシカセンターの暖かいご支援がなければ、かなわなかったものと改めてお礼申し上げます。また、贈呈式に参加された小野寺駐澳日本大使のスイス・アルプスでの計報は、帰国後間もない私たちを驚かせた、ここに深く哀悼の意を表したい。

（館長 千葉彬司）

ヤマネ

「ヤマネ」ってどんな動物だか知っていますか?と尋ねると、多くの人々は、ヤマメとかヤマネコ、そして、ヤマネズミなどを連想する。

名前はそのままのように動物の特徴をよく表す場合がある。世界でのヤマネの名前を見てみるとドイツでは、ジーベンシュレーファーと呼ばれるでこれは「よくねむるもの」という意味である。ロシアではソニーヤと呼ばれ、これも「ねほすけ」という意味である。

それでは、日本ではどうであろうか?

漢字では「冬眠鼠」(とうみんねずみ)と書くこともある。つまり、ネズミのような体で冬眠する動物という意味となる。だから、やはり、日本でもヤマネは、「ねむりやさん」というイメージが昔からあるようである。

ヤマネ科の動物は、世界ではヨーロッパ・アフリカ・中央アジア、そして、日本にすんでいる。全部で11種類いるが、日本のヤマネは、日本特産で、一属一種なので国指定の天然記念物になっている貴重な動物である。ニホンヤマネの化石は、50万年前の日本の地層からすでに出ている。ゾウなどが日本にいた時代で、人間は、まだ日本列島にはいない。そんな大昔からすんでいるヤマネが、本当に「ねほすけ」だけの動物だったら生き残ってこれないはずだ。

では、これからヤマネのくらしぶりをのぞ

湊 秋作

いてみることにしよう。

まず、ヤマネの基本的な紹介をしよう。日本でヤマネがすんでいるのは、本州・四国・九州の森林である。しかも、リスのように木の上で暮らしている。さらに、夜行性である。体重は、約25グラムと鶏卵の半分ほど。背中には、一本の黒いすじがあり、尾にはふさふさとした毛が生えている。目はくりっと大きくとてもかわいい。

私は、八ヶ岳山麓の清里で環境庁・文化庁の許可を得てヤマネの生態研究を続けている。



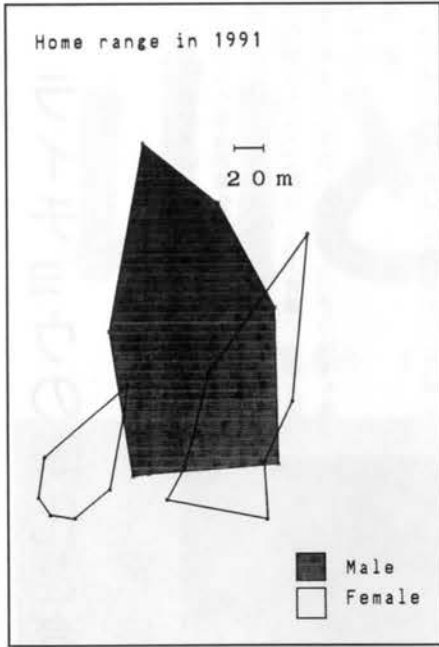
清里の森はアカマツ、リョウブ、ヤマザクラ、サワフタギなどが、なだらかな地面を覆っている。(私の住んでいる和歌山の山は、急斜面が多いので夜の調査は困難であるが、清里は、岩の割れ目に落ち込む心配もない)。

まず、捕まえたヤマネの背中に小さな発信機をつけ、追跡する。すると、ヤマネから発信される音がレシーバーから聞こえ、その音の大きさによって、暗い夜の森でも、今、どこにいるのかがわかるのである。朝になると、ヤマネは、休むのでどのような所に巣を作っているかがわかる。ある朝、寝場所を探しに森の中へ入ると、レシーバーのアンテナは、リョウブの切株を指した。でも、そこに巣らしきものはなにもなく、枯葉などが積もっているだけである。しかし、アンテナは、そこをあくまで指すので枯葉をめくってみるとなんとヤマネが、まるで「こんにちは」とあいさつをするように顔をこちらに向けて見上げているではないか。そのかわいいこと。

このようにして調べていくと、ヤマネの巣がわかってきた。樹洞、朽ち木の皮の隙間、そして、枝の上の通称「ハンモック巣」。清里のツツジなどの枝では、てんぐす病のため枝が束状に伸びてしまうことがある。でも、そのような所は、巣を作るには絶好の場所なので、ヤマネは、休んでいるのである。風が吹くと、その巣はゆらゆらと気持ちよさそうに揺れるので、私達は、それを「ハンモック巣」と名付けたのである。人間がそのような所でねられたら、さぞ、快適なことだろう。

また、発信機でヤマネの行動範囲もわかってきた。おとなの雄一頭で、約2000平方メートルである。甲子園の約半分ほどの広さである。小さな体のわりには広い。そして、





雄の行動範囲の中に雌2頭がそれぞれ、子供を育てていた。つまり、雄は、この子供達の父親であろう。(図参照)

次に、夜、直接、ヤマネの行動を観察することにした。ヤマネの背中に特殊な発光体を付け、夜の森に放すのである。すると、暗闇の枝上を発光体が走るの見える。その美しいこと、また、速いこと。あつというまに、隣の木に移ってどんどん向こうへ行ってしまう。まるで、「森の忍者」である。「ねぼすけ」のヤマネなどは全く違う。汗をかきながら、後を追うと、滞在して食事をする木が決まっていることがわかってきた。一つは、ズミでヤマネは、これの枯れ枝の皮の部分を盛んに食べていた。また、もう一つはアズキナシで、これに來るとヤマネは、葉の裏をまわってスケートするように滑る。そのすばやいこと、敏捷なこと、そして、何か黒い物を食べている。たぶん虫だと思いが5メートル上にあるので判断しにくい。普通、ヤマネは、アケビ・ヤマブドウ・ヤマザクラのようなやわらかくて甘い実を食べるので、ズミの皮を

夏に食べたのは、新しく不思議な記録となつた。

また、ヤマネは、昆虫も大好物である。カナブン・ガ・トンボなどをばりばりと食べる。ヤマヌという人の手のひらよりも大きいガでも、口で捕まえ、ばたばた暴れるガを細い枝まで運び、ガを手を持ちながら頭を下にして後ろ足でぶらさがり、食べ始める。まず、アンテナのような触角がついている頭を食いちぎる。次に、はねを一枚食いちぎる。そして、胸・腹を食べる。内臓は、特に好きなようである。ラーメンでもすすするようにして食べる。こんなヤマネは、まるで「森のハンター」である。

ヤマネの繁殖は、冬眠が終わってから始まる。ヤマネの交尾行動を飼育して観察していると、ヤマネは、音声をたくみに使うことがわかってきた。雄は、交尾行動を展開しながら、人には聞けない超音波を出す。しかも、その声は、ヤマネの赤ん坊とそっくりなのである。夜の森では、フクロウやテンなどがヤマネをねらっている。だから、雄は、この声を出して、雌を逃げないようにし、近づき、交尾するのである。この超音波は、フクロウにも聞こえないので、安全な通信手段なのだ。

また、赤ん坊は、生後15日ほどで目が開き、外出できるようになる頃、警戒音出す。一頭がこれを発すると、他の子供達は、いつせいに走りだし、なにかの

物陰に隠れる。このように、音声は、ヤマネが生活を運営する上で重要な働きを負っているのである。

9月の清里の森は、ヤマブドウなどの秋の幸が豊富になる。ヤマネは、これらをたくさん食べ、体重を急速に増やす。そして、冬眠に入っていく。

私は、冬眠前のヤマネに発信機を付け、森に放し、冬眠場所を調べることにした。すると、シラカバの腐った幹の中にもぐりこんだり、樹洞の中でやすやすと冬眠していた。あるとき、不思議なことに音が、地面から聞こえてきた。音が示す場所をよーく見ると、木の皮がちよっぴり、土から出ている。それをほめくると、ヤマネが、地面に浅いくぼみを作り、木の皮をふとんのようにかぶって、こんこんと眠っていた。ボールのように丸い。手のひらにのせると水のように冷たい。これは、体温を下けているからだ。ヤマネは、秋に体内に貯えた脂肪だけで冬を過ごす。それで、体温を0度近くまで下げ、心拍数・呼吸数も起きているときの10分の1ほどに落とし、省エネしながら春を待っているのだ。このため、日本では、ヤマネのことを、マリネズミとかコオリネズミと呼ぶ地方もあるのだが、こんな「ねぼすけ」だからこそ、何十万年も昔から、生きてこられたのだろう。

「ねぼすけって、とても すてきなことなんだ」

熊野川小学校教諭
理学博士



ライチョウウの孵化と育雛

宮野 典夫

山岳博物館では、国や県の補助をいただき、ライチョウ保護事業を進め、その一環として、低地における飼育増殖を行っている。今年度は採卵をして人工孵化・人工育雛による方法を6年ぶりに実施した。ここにその近況を報告する。

採卵

北アルプス蓮華岳より7月8日に、3巣より計8個の卵を採卵し、約5時間かけて現地から大町山岳博物館の孵卵施設まで運搬した。

孵卵器

使用した孵卵器は立体孵卵器で、器の内側の条件は温度37℃、湿度74～76%で、転卵は1時間に1回とした。

打殻

卵を孵卵器にいられてから5日目の7月13日にひとつの卵に打殻傷が生じた。この傷は卵の中のヒナがついたもので、打殻傷をつけるとその後は卵殻膜を少しずつクチバシでついで一周した時に孵化するのである。

孵化

7月14日、1羽目のヒナが誕生した。孵化直後のヒナはまだ歩くこともできず、羽毛もぬれたような状態である。孵化後12～24時間は孵卵器の中に置く。この間に歩くこともできるようになり、羽毛もふわふわしてくる。

7月14日から16日までに8羽が孵化した。

育雛器

ヒナが歩きはじめるようになってから、育雛器に移す。育雛器は親の腹下と同じような



孵化後数時間のヒナ

条件を設定した温室部と、エサなどを与えやすくするための冷室部とがある箱で、温室部と冷室部はカーテンで仕切られ、ヒナが自由に行ったり来たりできる。孵化直後の温室部の温度は37℃、湿度は50%に設定した。

餌付け

ライチョウのヒナは親鳥からエサを運んでもらうのではなく、自分で歩いてエサをつつきはじめた鳥である。孵化後すぐにエサを食べなくても、体の中に卵黄が残っていてこれを消化しつつ、口から得たエサも徐々に消化するのである。そのため、あまり早く餌付けを開始してしまうと卵黄の消化が進まず、問題が生じる。

餌付けには配合飼料、リンゴ、コマツナや



9日齢のヒナ

ミツバなどの細切りを用い、野草としてギンギシ、アカソ、リョウブ、タンポポなどを孵化後24時間以上してから与えた。

1週齢

ライチョウのヒナにとって1週齢から2週齢が大事な時期である。ヒナの体が小さく、休む時に自分の体温を保つことができないうで、野生ではメス親の腹の下に入って温まるが、飼育下ではこの条件を育雛器の温室部で再現してあげる。この時、暖か過ぎて、寒過ぎてもしラックスして休むことはない。ヒナが休む状態を観察しながら、温度調節を繰り返す。こうすることによって、ゆっくり休み、食べたエサが効率よく消化される。

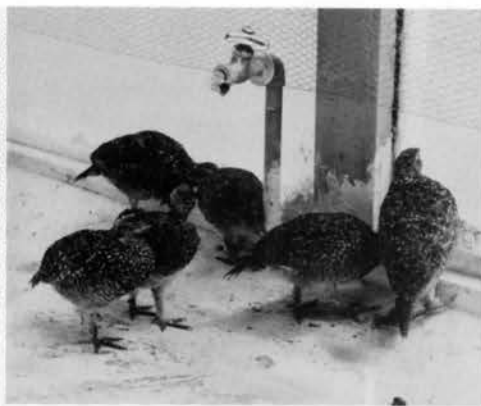
ライチョウには発達した盲腸がある。この時期に盲腸から排する糞がみられ、消化器系が順調であることの目安になる。ライチョウの腸に寄生するコクシジウムによる弊害もこのころにみられる。今回は3日目から正常な盲腸糞がみられ、コクシジウムの弊害もなか

廃温

孵化後30日をすぎると夜も加温の必要がなくなる。飼育下ではこの時期に育雛器の温源を切る。このことを廃温という。この時期の羽毛は首のまわりを除き、すっかり若鳥の姿になり、抜け落ちた羽根もみられるようになる。

育雛器を使用している時から飼育舎内の温度は18～24℃にしている。廃温の時期もこの温度をキープした。例年だと廃温の時期には猛暑で悩まされるが、今年は涼しい日が続き、ライチョウを育てるにはよい夏であった。

(大町山岳博物館副館長)



36日齢のヒナ

山と博物館 第38巻 第8号

一九九三年八月二十五日発行

発行所 千歳長野県大町市 TEL 〇二一

印刷所 大町 山岳博物館

大町 長野県大町市俵町

大町 大町市俵町

大町 大町市俵町

大町 大町市俵町

大町 大町市俵町

大町 大町市俵町

大町 大町市俵町

大町 大町市俵町

定価 年額 一、二〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号 長野四一(三三三三三)